

重症心身障害児（者）の性発達に対する看護者の認識

尾原 喜美子

高知大学医学部看護学科〒783 - 0043 高知県南国市岡豊町小蓮

**Nurses' awareness of sexual development in children with
severe physical and mental disabilities**

Kimiko OHARA

Division of Basic Nursing , Department of Nursing

Kochi University Kohasu Oko , Nangoku City,

Kochi(783-0043),Japan

Abstract

There are many issues to address so that children with disabilities can live to their fullest and be respected. In particular, children with disabilities experience prejudice and discrimination concerning not only their disabilities but also sexual development. Their families are often puzzled by and worry about the sexual development of their children. Therefore, we carried out a questionnaire survey to clarify the awareness of the sexual development/behavior of children with disabilities among nurses who are closely involved in their life. The subjects were 125 nurses working in facilities for children with severe physical and mental disabilities, of whom 108 (86.4%) replied to the questionnaire. The results of the questionnaire showed that the awareness of the sexual development/behavior of the disabled children varied with the number of years of experience as nurses, and that the awareness

of growth-associated problems and whether or not sex education should be given varied with the age groups of the nurses. Nurses considered that active support for the growth-associated sexual development of children in response to the children's request and involvement according to the degree of disability are important.

鍵ワード；障害児(者)、看護者、性成長・発達、認識

はじめに

ノーマライゼーションの考えから、障害児も健常児と同様に性に関する権利を認める立場が強くなってきている。とはいっても日本においては諸外国のように浸透しているとはいいがたい。元来、マイノリティである障害児(者)の性は本来タブー視されてきた。¹⁾ 障害児は、障害そのものに対する偏見や性発達に対する偏見と二重の偏見・差別を受けてきたともいえる。^{2) 3)} しかし、最近における障害児の性教育や性のとらえ方に対して、二重の偏見や差別は充分とは言えないが払拭されつつあるように思う。その背景には、一つは障害児も健常児と同じように、発達の個人差はあっても性的発達や二次性徴の発言、性の心理的・生理的欲求が発現するのであり、この性的発達欲求を保護することが必要であるとの認識がなされるようになってきた。2つめは、障害児(者)も「性」の問題による性的欲求の解消、異性との人間関係、結婚、育児など人格を持った人間としての生活や生きる力の教育が・発達が可能であり、教育や社会による保障・連携・サービスが必要であると認識されるようになってきたこと、3つめは、「性」の問題に対する認識や概念が、単なる性=SEXという認識から。セクシュアリティという概念の発達^{4) 5)}により、「性」を生理・心理・社会的側面からとらえ直し、性は全人的(人格)の問題として認識するようになってきたこと^{6) 7)}、4つめには、障害児(者)自身及びその家族、関係者による「性」の発達保障欲求や障害児の性教育実践による成果が検証されつつあることなどがあげられる。いずれにしても、障害児などマイノリティの「性」に対する偏見・差別から一人ひとりの発達や生き方の問題として「性」の問題が見直され、その重要性が認識されるようになってきたといえる。

今まで私は、障害児教育に携わる教師・養護教諭・障害児の家族を対象に、養護学校での性教育の現状や教師・養護教諭の障害児の「性」に対する認識、障害児の性発達の現状、家族のわが子の性発達・性行動の捉え方などの調査を行ってきた。^{8) 9)} 障害児(者)が、人として尊厳され生き生きと生活できるために、性に関する問題を含めまだまだ多くの課題が山積している。障害児の家族は、子どもの障害の種類や程度の差はあれ、性の発達に伴い、わが子の性に対する戸惑いと不安は大きかった。障害児にとり「性」は、とてつもなく高度で複雑な課題であるため、家族は、わが子の性的能力をはじめとする表現・理解、判断力の不十分さ、発達障害、さらには対人関係、社会的な生活能力の遅れなどにより「対

応に困っている」現状であった。家族の「対応に困っている」現状に、養護学校の教諭や養護教諭は、子どもの発達に合わせた系統的なカリキュラムで性教育を行うことの重要性を認識しているが、子どもの能力に合わせた性教育の実施や発達欲求にあわせた学校としての対応は、まだまだ不十分な状態にあった。

そこで、今回の調査は、障害児施設で、一日24時間通して障害児（者）の生活に密着した関わりをもっている看護師に焦点をあて、家庭とは違った場所で生活する障害児（者）の性発達や性行動を把握すると同時に、看護者の性に対する認識を明らかにしたいと考えた。

性に関する問題は、人間の人権の問題としてとらえ、いかなる人も平等であり、個人のプライバシーを尊重し偏見や差別のない看護を行うため重要であることから障害児看護への示唆を得たいと考えた。

I 研究目的

重症心身障害児（者）に関わる看護者が重症心身障害児（者）の性発達・性行動をどのように認識しているか明らかにする。

II 研究方法

1. データ収集

調査対象・期間

重症心身障害児施設に勤務する看護師125名

調査期間：2000年2月～3月

調査項目

① 属性：性別、年齢、結婚の有無、重症心身症海事看護経験年数について調査した。

② 性発達に対する看護者の認識：

看護者の「障害児の性発達に対する認識」測定尺度は、障害児の性成長・発達に影響を及ぼすと考えられる要因や障害児（者）看護体験などを参考に筆者が作成した。測定項目は、9つの大項目とその大項目を構成する50の小項目からなり、3：はい、2：どちらともいえない、1：いいえの3段階からなる間隔尺度とした。

項目は、9大項目と50の小項目からなり「1. 性の捉え方」5項目、「2. 性（セックス）の認識」4項目、「3. 日常生活での関わり」4項目、「4. 社会環境の影響」9項目、「5. 成長に伴う悩み」5項目、「6. 障害児（者）家族の思い」8項目、「7. 障害児（者）看護の経験」5項目、「8. 性教育の是非」7項目、「9. 障害児（者）への性教育」3項目である。

「1. 性の捉え方」は、人間の「性」のもつ意味や「性」の目的についての質問で主としてセクシュアリティの概念からの問いである。「2. 性（セックス）の認識」は、人間を生物学的側面から捉えた性（SEX）についての質問で、SEXをどのように捉えるかの問である。

「3. 日常生活での関わり」は、看護者が、自分の家庭や職場で性について会話するなど開放的に性を捉えているかどうかの問である。「4. 社会環境の影響」は、子どもの性発達に影響を与えると思われる看護者自身の行動や、看護者が過去にとった行動の振りかえりと現代の子どもの言動についての質問である。「5. 成長に伴う悩み」は、障害児（者）の成長・発達に伴う性徴や性行動、性的欲求に対する看護者の対応についての質問である。

「6. 障害児（者）の家族の思い」は、看護者からみた障害児〔者〕の家族のわが子の性成

長や性行動に対する思いに関する問いである。

「7. 障害児(者)看護の経験」は、看護者が今までの障害児(者)看護で、障害児(者)の性的相談の有無とその対応についての質問である。「8. 性教育の是非」は、学校教育における性教育の必要性と指導者に関する質問項目である。

「9. 障害児(者)への性教育」は、障害児(者)への性教育の必要性についての質問である。データ分析には統計ソフトSPSS 12.0を用い、基本統計量の算出、t検定、一元配置分散分析を行なった。

表1 調査項目

大項目	小項目	項目数
1. 性のとらえ方	①性的欲求 ②人間と性 ③性の目的	5
2. 性(セックス)に認識	①性の重要性 ②年齢と性 ③異性への関心	4
3. 日常生活での関わり	①家庭・社会での会話 ②羞恥心	4
4. 社会環境の影響	①性発達・成長への影響 ②性発達と性行動 ③性行動の理解	9
5. 成長に伴う悩み	①障害児の性行動 ②性行動と成長 ③障害児の性のとらえ方	5
6. 障害児(者)の家族の思い	①家族の思い ②家族の援助者	8
7. 障害児(者)看護の経験	①性的欲求への援助と対処 ②性的な悩みの相談・指導	5
8. 性教育の是非	①性教育の場・人 ②性教育の目的・方法	7
9. 障害児(者)への性教育	①障害児の性教育の必要性 ②障害児の性成長に伴う問題	3

2. 倫理的配慮

対象者には文書と口頭で研究の主旨と目的、プライバシー保護の厳守、データは研究目的以外には用いないこと、協力は自由意思であることなどを説明し、回収箱にて回収した。データは全て統計的に処理した。

Ⅲ 結果

回収108名、回収率(86.4%)であった。

1. 対象の属性

対象者の年齢は、20代11名(10.2%)、30代26名(24.1%)、40代38名(35.2%)、50代33名(30.6%)であった。性別は、男性6名(5.6%)女性102名(94.4%)、結婚の有無は、既婚者77名(71.3%)、未婚者31名(28.7%)であった。重症心身障害児(者)看護の経験年数は、経験なし8名(7.4%)、5年未満22名(20.4%)、6~15年39名(36.1%)、16~25年26名(24.1%)、26年以上13名(12.0%)であった。

表2 対象者の特性

対象者	年 代				性 別		結 婚 の 有 無		経 験 年 数				
	20才代	30才代	40才代	50才代	男性	女性	既婚	未婚	なし	5年未満	6~15年	16~25年	26年以上
人数	11	26	38	33	6	102	77	31	8	22	39	26	13
%	10.2	24.1	35.2	30.6	5.6	94.4	71.3	28.7	7.4	20.4	36.1	24.1	12

2. 看護者の性認識：

1) 項目別平均値

全50項目の平均値は2.11で、50項目中26項目は平均値より高い項目であった。平均値が高い5項目は、「子どもの性発達は生活環境や社会変動の影響を受ける」2.93、「性的欲求は人間の基本的な欲求である」2.92、「性教育は性非行防止のための重要な教育である」2.82、「性教育は生命の尊厳や人間のパーソナリティ形成上非常に重要である」2.82「人間の性的欲求は抑えることができる」2.79などであった。平均値の低い項目は、「障害児（者）がマスターベーションなど性行動を行うのは異常である」1.09、「性教育は学校の先生が中心になって行うものである」1.16、「障害児の家族と障害児の性について話したことがある」1.17、「障害児の性的な悩みの解消に関わったことがある」1.94、「障害児の性的な悩みの相談に乗ったことがある」1.29などであった。

表3 平均値の高い項目

順位	項目	平均値	標準偏差
1	子どもの性発達は生活環境や社会状況の変動に影響を受ける	2.9259	0.3265
2	性的欲求は人間の基本的な欲求である	2.9167	0.3384
3	性教育は性非行防止のために重要な教育である	2.8241	0.4867
4	性教育は生命の尊厳や人間のパーソナリティ形成上非常に重要である	2.8241	0.4702
5	障害児で能力のある児は夢精やマスターベーションを行っている	2.7963	0.4046

表4 平均値の低い項目

順位	項目	平均値	標準偏差
1	障害児がマスターベーションなど性行動を行うのは異常行動である	1.0926	0.2912
2	性教育は学校の先生が中心になって行なうものである	1.1574	0.4138
3	障害児の家族と障害児の性について話したことがある	1.1759	0.4702
4	障害児の性的な悩みの解消に関わったことがある	1.1944	0.4826
5	障害児の性的な悩みの相談にのったことがある	1.287	0.6273

2) 9つの大項目別平均値

大項目の平均値は、「9. 障害児（者）への性教育」2.58、「1. 性の捉え方」2.28、「4. 社会環境の影響」2.27、「8. 性教育の是非」2.24、「7. 障害児（者）看護の経験」2.24、「2. 性（セックス）の認識」2.19、「5. 成長に伴う悩み」2.09、「3. 日常生活での関わり」1.93、「6. 障害児（者）家族の思い」1.88、の順で高かった。「障害児（者）の家族の思い」「日常生活での関わり」「成長に伴う悩み」の平均値は全体の平均値より低かった。（ $p < 0.05$ ）

表5 大項目の平均値

	大項目	平均値 ± SD
1	性の捉え方	2.28 ± 0.84
2	性（セックス）の認識	2.19 ± 0.80
3	日常生活での関わり	1.93 ± 0.94 ※※
4	社会環境の影響	2.27 ± 0.80
5	成長に伴う悩み	2.09 ± 0.79
6	障害児（者）家族の思い	1.88 ± 0.65
7	障害児（者）看護の経験	2.24 ± 0.83 ※※
8	性教育の是非	1.92 ± 0.89
9	障害児（者）と性教育	2.58 ± 0.59

※※ $p > 0.05$

3) 性発達に影響を与える要因と対象者の特性との関係

看護者の特性と障害児(者)の性に関する認識について一元配置分散分析と多重比較を行った。

a. 看護者の年代別と障害児(者)の性に関する認識

年代別平均値は、「5. 性成長に伴う悩み」で30代と50代、「障害児(者)と性教育」で30代と50代、「性教育の是非」で50代と20代、40代の間で有意差があった。「5. 性成長に伴う悩み」の平均値は、30代が2.53、50代が2.52で30代が若干高かった。(p<.05) 「障害児(者)と性教育」は、30代が2.55、50代2.53で30代が僅かに高かった。(p<.05) 「性教育の是非」は、50代1.92、20代2.06、40代1.91であって50代に比し20代は高く40代は低かった。(p<.01)

b. 看護者の性別と障害児(者)の性に関する認識

男女別と障害児(者)の性に関する認識には相関はなかったが、「3. 日常生活での関わり」、「5. 成長に伴う悩み」、「6. 障害児(者)家族の思い」、「7. 障害児(者)看護の経験」、「8. 性教育の是非」の5項目は男性の平均値が女性の平均値より高い傾向にあった。「1. 性の捉え方」は、平均値2.43でほぼ同様であった。

c. 看護者の結婚の有無と障害児(者)の性に関する認識

結婚の有無別では、「5. 成長に伴う悩み」で未婚者2.56、既婚者2.51で有意差があり未婚者の平均値が高かった。(p<.05) 既婚者は未婚者よりも9項目4中において平均値が低い傾向を示し、既婚者の平均値が高かった大項目は、「1. 性の捉え方」「2. 性(SEX)に認識」「3. 日常生活での関わり」の3項目であった。

表6 対象者の特性と大項目の平均値

特性 大項目	年代				性別		結婚の有無		経験年数				
	20代	30代	40代	50代	男性	女性	既婚	未婚	なし	5年未満	6~15年	16~25年	26年以上
1 性の捉え方	2.33	2.21	2.33	2.26	2.43	2.43	2.28	2.22	2.25	2.28	2.36	2.21	2.17
2 性(セックス)の認識	2.16	2.18	2.25	2.1	2.3	2.33	2.21	2.17	2.13	2.19	2.18	2.23	2.19
3 日常生活での関わり	1.19	2	1.93	1.92	2	1.94	1.95	1.91	2.19	2.02	1.92	1.92	1.75
4 社会環境の影響	2.24	2.27	2.33	2.19	2.24	2.27	2.26	2.28	2.36	2.28	2.27	2.26	2.2
5 成長に伴う悩み	2.61	2.53	2.5	2.52	2.58	2.52	2.51	2.56	2.53	2.58	2.54	2.54	2.25
6 障害児(者)の家族の思い	1.66	1.63	1.7	1.65	1.71	1.66	1.64	1.74	1.72	1.57	1.71	1.69	1.63
7 障害児(者)看護の経験	1.95	1.88	1.98	1.88	2	1.92	1.92	1.94	1.92	1.92	1.95	1.92	1.86
8 性教育の是非	2.06	1.86	1.91	1.92	1.93	1.92	1.92	1.95	2.05	1.97	1.89	1.9	1.91
9 障害児(者)と性教育	2.61	2.55	2.64	2.53	2.56	2.58	2.57	2.61	2.79	2.5	2.57	2.62	2.54

* p<.05 ** p<.001

表7 項目別平均値

	項 目	平均値	S D
1	性的欲求(性欲)は人間の基本的な欲求である	2.917	0.327
2	人間の性的欲求は抑えることができる	2.796	0.488
3	人間の性は子孫繁栄のためにある	2.083	0.898
4	性は人間同士のコミュニケーションのために非常に重要である	2.491	0.743
5	人間のセックスは子孫反映のために行うものである	1.722	0.818
6	人間の性は快楽性を求めるものである	1.87	0.714
7	家族で性のことについて話した事がある	1.75	0.958
8	友人や職場の同僚達と性的な内容について話すことがある	2.157	0.968
9	性的な内容の会話を日常生活の中で話すことは恥ずかしいことである	1.454	0.741
10	性的な内容については人前で話すべきではない	2.398	0.748
11	人間は年を取っても性欲が減退するものではなくセックスができる	1.12	0.693
12	異性に対する関心は年齢とは関係がない	1.472	0.716
13	セックスとは異性間で触れ合うことであり、性交のみをさすのではない	2.685	0.606
14	障害児も健常児と同様に結婚し家庭を作る欲求をもっている	2.787	0.411
15	性教育は学校で充分行われている	1.454	0.602
16	自分の子供に家庭で性教育を行うことができた	1.852	0.759
17	子供と一緒にテレビを見ていてエッチな場面になると話しをそらしたり見ていないふりをす	1.769	0.849
18	性教育は学校の先生が中心になって行うものである	1.157	0.414
19	性教育は生命の尊厳や人間のパーソナリティ形成上非常に重要である	2.824	0.47
20	性教育は性非行防止のために重要な教育である	2.824	0.49
21	現代は子供の性発達に伴った適切な教育がなされていない	1.361	0.555
22	子供の性発達は生活環境や社会状況の変動による影響を受ける	2.926	0.327
23	子供と一緒にエッチな映画やテレビを見ることもある	1.444	0.674
24	子供は自分の性発達について悩みや問題を抱えている	2.185	0.712
25	子供は自分の性の悩みや問題について相談する相手がいる	2.13	0.548
26	最近の子供の性発達は自分の子供の頃と比較すると早い	2.694	0.571
27	最近の子供の性行動は自分の子供の頃と比較すると早い	2.796	0.488
28	最近の子供の性行動を理解することは難しい	2.602	0.665
29	障害児にも障害の程度に合わせた性教育が必要である	2.741	0.5
30	障害児に性教育を行っても理解できないので性教育の必要はない	2.648	0.535
31	障害児は健常児に比べ性発達が遅い	1.704	0.584
32	障害児はポルノ雑誌やアダルトビデオを見ないほうがよい	1.472	0.52
33	障害児がマスターベーションなど性行動を行うのは異状行動である	1.098	0.291
34	障害児で能力のある児は夢精やマスターベーションを行っていると思う	2.796	0.405
35	障害児は月経について悩みや問題をもっていると思う	2.667	0.474
36	障害児は性の欲求を自分で解決できないので誰かの助けが必要だ	2.417	0.549
37	障害児の家族は障害児の性について外部に知られたいと思っていない	1.806	0.463
38	障害児の家族は障害児の性についてふれてほしくないと思っている	1.889	0.499
39	障害児の家族と障害児の性について話したことがある	1.176	0.47
40	障害児の家族は障害児の性の問題について話してほしくないと思っている	1.981	0.473
41	障害児の家族は障害児の性について家庭内で悩みや問題をもっていると思う	2.546	0.519
42	障害児の性は療育・看護上特に問題とならない	2.685	0.558
43	障害児の性的問題行動は成長に従って自然に解決する	1.843	0.598
44	障害児の性的問題は特に目立って取り上げる必要はない	2.352	0.66
45	障害児の性的問題はオープンにすべきことではない	2.398	0.64
46	障害児の性に関する対処方法は関わる職員間で異なっても仕方がない	1.787	0.711
47	障害児の性的な内容には看護上余り関わりたくない	2.231	0.744
48	障害児の性的な問題の対処は専門家に任せるとよい	2.065	0.789
49	障害児の性的な悩みの相談に乗ったことがある	1.287	0.627
50	障害児の性的な悩みの解消に関わったことがある	1.194	0.483

d. 看護者の障害児看護経験年数と障害児(者)の性に関する認識

障害児(者)の看護経験年数別平均値は、「1. 性の捉え方」と看護経験の有無、経験年数との間に有意差があった。看護の経験のないもの2.25、経験5年未満2.28、経験6～15年2.36、16～25年2.21、25年以上2.17であった。看護経験のないものより経験が15年未満のもの平均値が高く、看護経験のないものより16年以上の経験のあるもののほうが平均値が低かった。他の8項目においては有意差がみられなかった。

IV 考察

a. 小項目ごとについて

調査項目ごとの結果では、50項目中26項目は平均値より高かった。平均値が高い上位5項目は、「子どもの性発達は生活環境や社会変動の影響を受ける」「性的欲求は人間の基本的な欲求である」「性教育は性非行防止のための重要な教育である」「性教育は生命の尊厳や人間のパーソナリティ形成上非常に重要である」「人間の性的欲求は抑えることができる」であった。看護者は、人間の性は人間としての基本的欲求であり、それは自分でコントロールできるものである。しかし、子どもの性発達や性行動は、社会環境から大きく影響を受ける。子どもを健康に育てるためには、生命の尊厳の重要性やパーソナリティ形成上不可欠といわれる性教育を行わなければならないと捉えていた。

平均値が低かった下位5項目は、「障害児(者)がマスターベーションなど性行動を行うのは異常である」、「性教育は学校の先生が中心になって行うものである」、「障害児の家族と障害児の性について話したことがある」、「障害児(者)の性的な悩みの解消に関わったことがある」、「障害児(者)の性的な悩みの相談に乗ったことがある」などであった。看護者は、性教育は学校の先生だけで行うのではないことや障害児がマスターベーションを行うことは異常ではないと認識していたが、障害児(者)の性的な悩みの相談や対処に関わったことは少ないという結果であった。また、障害児(者)の家族と性について話したことも少なかった。このことから、看護者は、障害児(者)の性発達や性行動の発現を認めてはいるが、実際の看護場面で障害児(者)やその家族に、性に関する話をしたり性的悩みへの適切な対応ができていないといえる。

b. 9つの大項目別平均値について

大項目の平均値は、「9. 障害児(者)への性教育」2.58、「1. 性の捉え方」2.28、「4. 社会環境の影響」2.27、「8. 性教育の是非」2.24、「7. 障害児(者)看護の経験」2.24、「2. 性(セックス)の認識」2.19、「5. 成長に伴う悩み」2.09、「3. 日常生活での関わり」1.93、「6. 障害児(者)家族の思い」1.88、の順で高かった。「障害児(者)の家族の思い」「日常生活での関わり」「成長に伴う悩み」の平均値は全体の平均値より低かった。(p<0.001)

看護者は、障害児(者)には障害の程度にあわせた性教育が必要であるが、子どもの性発達の現状や障害の程度、理解能力の程度から考えるとめだって取り上げる必要がないと認識していた。また、性は人間として当然の基本的な欲求であること、性行動はは理性を持って対応できること、性の目的は、子孫繁栄や快楽性であると認識していた。今までの障害児(者)看護では障害児(者)の性的相談や悩みの対応に関わった経験が少なく、看護上で

は特に問題となることではないととらえていた。しかし、障害児（者）に性的な問題が発生しても、障害児（者）自身が解決することは困難なので、誰かの援助が必要であるととらえていた。そして、看護者は、障害児（者）の家族はわが子の性発達や性行動について悩みや問題を抱えているが、家族は、わが子の性について触れて欲しくない、知られたくないと思っていると認識していた。現代の子どもの性は急速に成長発達し、子ども達は性に関する悩みや問題を多く抱えていると認識していた反面、看護者自身の日常生活では、友人や職場で性的な話をすることもあるが少なく、性の話は人前ですべきではない、性的な話を家族ですることは恥ずかしいことであると認識していた。

c. 看護者の年代別と障害児（者）の性に関する認識

「5. 性成長に伴う悩み」は、30代が50代より高い平均値であった。このことは、30代の看護者が、50代の看護者よりも障害児（者）は成長に伴う悩みを抱えていると認識していることになる。障害児（者）も健常児と同様に結婚し家庭を作る欲求を持っていることや、健常児と同様の悩みや問題を抱えていると捉えていた。30代は人生の成人期に相当し「安定や落ち着きの時代」と考えられている。男女とも結婚という形で新しい家庭を築き社会的にも安定し、子育ての真っ最中に時期である。一方50代は中年期で、子どもの養育という親としての役割から開放され子どもが独立し自分自身に目を向けることができる時期である。多くの社会生活の中からパーソナリティや行動様式、態度などが決定され、30代に比べ、物事を一定の枠の中でとらえようとする傾向が強いのではないと思われる。障害児（者）の性発達や性行動、性に関する悩みや対処に対して否定的で開放的に捉えることが困難な状況を現しているのではないだろうか。「9. 障害児（者）と性教育」においても30代が50代より平均値が僅かに高い結果であった。30代は50代より障害児（者）への性教育の必要性を認識している結果だといえる。児（者）の能力に力に合わせた性教育・指導が必要であること、性成長に伴う性的な問題があれば、児個々に応じた対処について取り上げ考えなければならないことを示唆している。「8. 性教育の是非」においても、50代より20代の平均値が高い結果であった。障害児（者）の性発達や性成長、それに伴う性行動や性に関する問題の認識は、若い看護者よりも現役看護者として最も高い年代である50代の方が受け入れにくいようである。看護者として多くの経験を積んでいるけれども、性に関する事柄については閉鎖的なとらえかた方になってしまうといったことではないだろうか。

d. 看護者の結婚の有無と障害児（者）の性に関する認識

結婚の有無別に障害児（者）の性に関する認識では、「5. 成長に伴う悩み」で未婚者の認識が既婚者の認識より高い結果であった。そして、未婚者の平均値は9項目5中において高かった。既婚者の平均値が高かった大項目は、「1. 性の捉え方」「2. 性（SEX）に認識」「3. 日常生活での関わり」の3項目であった。結婚とは、男性と女性を、夫と妻として結びつける社会的な制度であると同時に、夫婦という一つの間人間関係を形成し新しい家庭を誕生させることである。結婚では、夫婦が互いの価値や規範を尊重し、人間関係を維持するために理解・協力することが重要である。結婚している看護者は、性を人間同士の結びつきであり、子孫繁栄や快楽性を目的と刷ると同時に、性は人間同士のコミュニケー

ションであり年齢に関係なくSEXはありえると捉えていた。そして、性的な事柄について家族内や友人、職場で話すこともあったと答えていた。個人差も大きいですが、結婚によって社会的に認められた夫婦は、性やSEXに関する事柄を、未婚者の比べ比較的語りやすい状況であるとも思われる。一方、未婚者は、障害児（者）の性に関する認識が、既婚者の平均値より高いことから、障害児（者）の性を受容的に捉えることができる傾向にあると考えられる。

e. 看護者の障害児看護経験年数と障害児（者）の性に関する認識

障害児（者）の看護経験年数別に平均値をみると、「1. 性の捉え方」と看護経験の有無、経験年数との間に有意差があった。障害児（者）看護経験のないものより経験が15年未満のもの認識が高く、障害児（者）看護経験のないものは、16年以上の経験のあるものより平均値が高かった。他の8代項目においては有意差がみられなかった。障害児（者）看護経験は、性の捉え方と関係があることを示し、看護の経験が5年～15年以内の看護者が高い平均値を示したことになる。看護経験5～15年ということは、専門職としてベテランの域で、障害児（者）の療育や生活全般に渡り障害児（者）看護の専門者といえる。経験的にも人間的にも成熟した時期であり、人間の持つ性の意味や目的について信念があると思われる。

障害児（者）看護の経験がなかったり、5年未満や25年以上の経験の場合を考えると、経験の少ないことや非常に多いことは、人間の性をどのように捉え、どのように考えるか、いわゆる性の認識形成に大きく影響する因子であるといえる。

まとめ

看護者は障害児（者）の性は健康な児と同様に成長・発達し、児（者）の成長に伴う性行動を積極的に援助し、児（者）の求めに対応できることや、障害の程度に応じた性教育が必要であると認識していた。

文献

- 1) 谷口明宏：障害者の「性」に関する歴史的経過と今日的課題、Human Sexuality、東山書房、22 - 23、N019、1995.
- 2) 水野祐子：障害者、マイノリティの性と性教育 「障害児性教育論」、22 - 23、あゆみ出版、1995.
- 3) 大井清吉：性の権利、Human Sexuality、26 - 30. 東山書房、1991.
- 4) カーケンダール.L.A(Karkendall.L.A):The role of sex in modern society、450 - 459、現代性教育出版、1972.
- 5) ダイヤモンド.M(Diamond.M)：田草川まゆみ訳、人間の性とは何か、小学館、25 - 29. 1994.
- 6) 黒川和夫：性・健康・教育・セクシュアリティを問い直す、第4号、2 - 5. 1988.
- 7) 前掲書 4)
- 8) 尾原喜美子、木村龍雄：障害児学校における性教育の現状と課題、高知大学教育学部研究報告1 (55)、133-145. 1998.
- 9) 木村龍雄、尾原喜美子：障害児学校の性教育に対する教師の意識、高知大学教育学部

研究報告、1(55)、148-158. 1998.

10) 前掲書 5)

11) 小川捷之：エリクソンの小児性愛理論、現代エスプリ別冊、63 - 77. 至文堂、1976.

山内光哉：発達心理学（下）青年・成人・老年期、ナカニシヤ出版、22 - 32、1999.

12) 望月崇、本村汎：現代家族の危機 新しいライフサイクルの設計、有斐閣選書、192

- 193、1999.